

### ジョイスの時代のダブリン(9)

YUKI, Hideo / 結城, 英雄

---

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

60

(開始ページ / Start Page)

69

(終了ページ / End Page)

87

(発行年 / Year)

2010-03-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00006748>

## ジョイスの時代のダブリン(9)

結 城 英 雄

### 娯 楽

#### ブルーム一家と娯楽

市民たちの日常生活には、仕事から解放された後のひと時、日曜日、あるいはバンク・ホリデーなど、自由な時間もあった。彼らはそうした余暇をどう過ごしていたのだろうか。たとえば、ブルーム一家の思い出としては、ディロン家での芝生のボウリング、ドイル家でのジェスチャー遊び、ゲイアティ座などでの観劇、レパーズタウンでの競馬、ホースの丘やシュガーローフ山へのピクニック、あるいは娘ミリーののための遊覧船でのダブリン湾周遊などがある。夫婦とも音楽好きであることから、音楽を中心とした楽しみも数多い。いずれも一家の共通した記憶になっている。

一般的に、劇場、音楽、酒場、スポーツ、ギャンブル、旅行、見せ物、読書、新聞、ゲーム、園芸などが人々の主な娯楽の対象であった。イースター、ハロウィーン、クリスマスといった宗教にまつわる年中行事、あるいは馬事大会や不定期に開催されるバザーなども楽しみであった。また日曜日に教会へ出かける社交的な喜びもあった。さらに家庭サーヴィス的なものもある。いつの時代も「妻というものをどう扱うべきか」(17.659)というのは、夫にとっての難題であるらしい。いずれの場合も、そこには人々を連帯させる共同体のようなものが形成されている。そもそも、アイルランド人は歓待の精神に溢れ、もてなすことや、もてなされるといったことが好きである。「リンチ」(lynch)という言葉は、よそ者を歓待しなかった息子を父親が咎め処刑したという、アイルランド西部ゴールウェイのリンチ家に由来すると言われている。

娯楽は市民の社会的な指標でもあり、階級、職業、収入、交遊関係、宗教、あるいは年齢や性差などによりその質も異なっていた。娯楽は上流階級や中流階級の特権であったが、労働者階級にもそれなりの楽しみがやはりあったのだ。劇場ではアビーのような文学的な芳香の強い舞台からダン・ラウリーのようなミュージックホールまで、音楽では古典音楽の演奏会から家庭や酒場での歌唱まで、酒では高級なワインから安手のビールまで、スポーツではイギリス式のクリケットから民族主義的なハーリングまで、ギャンブルでは数百ポンドの賭けから数シリングの賭けまで、旅行では大陸やイギリスへのツアーから国内での散策まで、見せ物やゲームでは大人向けのものから子供向けのものまで、読書や新聞においては政治色や宗教色の濃厚のものからポルノまがいのものまで、園芸では広大な庭園から鉢植えまで

と様々であった。社会的地位により相違が見られただけである。

巡回の見せ物も市民に憩いを提供していた。ディオラマ、サーカス、回転木馬、ミリオラマも、市内のロータンドなどの広場で興行していた。ロンドンのマダム・タッソー蠟人形館のようなものもあった。サーカスでは空中ブランコ、動物の曲芸、道化芝居などのレパトリーで観客を楽しませた。ブルームはアルバート・ヘングラーのサーカス興業に際して、道化からパパと呼ばれた経験を懐む（第十七挿話）。大道ではパンチ&ジュディ・ショーの他、犬、熊、猿などの芸、音楽、手品、アクロバット、火食い術なども披露された。あるいは手回しオルガン弾きなどもいた。

その一方で、アイルランドの娯楽には国独自の問題もあった。「ドニーブルックの市みたいな馬鹿さわぎのほうがアイルランド人の性に合う」（5.561）とブルームがつぶやくように、庶民の娯楽はかつて「市」と関わりがあった。が、そうしたお祭り騒ぎは、シオポールド・マシュー神父の禁酒運動やダニエル・オコネルの怪物集会という運動に姿を変えながら、人々の意識下に沈潜することになった。市の騒乱が姿を消し、近代的な娯楽が始まった背景には、十九世紀前半のカトリック教会の教え、教育の普及、警察の介入などによる禁圧があった。そして1845年に始まる大飢饉が時代の流れを加速させた。「酒場」は飲酒を隔離する場所となり、警察官が定期的に巡回していた。植民地支配の抑圧に対する唯一の顕在的な発露は、アイルランド古代の神話やスポーツの復活であった。

本稿では、ブルーム一家を中心としながら、当時の娯楽について検討することにする。娯楽もヴィクトリア朝のコンテクストに組み込まれ、人々の意識を暗々裏に織りあげていた。民族主義運動が展開していたとはいえ、アイルランドの社会は、すでにイギリスの文化と密接に絡み合っていたのである（Huchinson）。ブルーム一家もこうしたイデオロギーの支配下に置かれていたと思われる。一家の朝食用の紅茶や砂糖にしても、イギリスの帝国主義と無縁ではない。

## 劇 場

娯楽の一つとして何よりも観劇という楽しみが挙げられる。ステイーヴンは亡き母親の思い出に憑かれながら、またブルームはオリエントへの想念に惹かれて、それぞれ「怪傑ターコー」（1.258/4.89）を想起している。これは十九世紀末に人気を博し、クリスマスに繰り返し上演されたパントマイムの主人公の名前である。日本で言えば月光仮面やウルトラマンのようなもので、知らない人がいなかったほど人気があり、人気があったからこそ二人を結ぶ共通の記憶になっている。ブルームは教会のミサを見つめながら、いみじくも「みんなが一家団欒みたいな気分になれるんでね……みんなが同じ流れに乗る」（5.362-3）とつぶやいている。宗教（mass = 聖体拝領）も劇場（mass = 大衆）も、人々を連帯させる社会装置である。

ダブリンには古くから劇場があり、人々を楽しませていた。三大劇場としてゲイアティ座、ロイヤル座、クイーン座があり、中流以上の人々の憩いの場であった。そして下層の人々のメッカとしては、エンパイア劇場とティヴォリ座が、いずれもミュージックホールとして賑わっていた。さらに、アイルランドの国民演劇を演出するという、文学的な響きのするアビー劇場も、1904年12月に開設される予定で

あった。

三大劇場のうちで、ゲイアティ座は音楽的な出し物が多く、ロイヤル座は劇を中心にし、クイーン座はその中間であったと言われる。それぞれロンドンを拠点とするカール・ローザ(16.203)やムーディーマナズ(16.527)といった歌劇団を呼びよせ、主として英語によるオペラを上演していた。『ボヘミアン・ガール』、『カルメン』、『ファウスト』、『キラーニーの百合』、『トロヴァトーレ』、『マリターナ』、『連隊の娘』など、毎年必ずどこかで上演されていた。また、パントマイムもゲイアティ座の1873年上演の『怪傑ターコー』を嚆矢とし、それぞれ毎年12月から1月まで、時とすると2月まで上演していた。演目としては『シンデレラ』、『船乗りシンドバッド』、『長靴をはいた猫』などがあつた。時事的な事柄も取り入れ、大人も子供も楽しめた。

1904年6月16日においては、ゲイアティ座がミセス・バンドマン・パーマー扮する『見捨てられたリア』を、ロイヤル座がユージン・ストラットンのミンストレル・ショーを、クイーンズ座がエルスター・グライムズ歌劇団による『キラーニーの百合』をそれぞれ上演している。いずれの興業も新聞や貼り紙で宣伝されていた。ブルームは葬式馬車の窓から広告板をながめ、「ユージン・ストラットン、ミセス・バンドマン・パーマー。今夜おれは《リア》を見に行けるだろうか。行くとは言ったが。それとも《キラーニーの百合》？ エルスター・グライムズ歌劇団」(6.184)とつぶやいている。ブルームが歌曲「あそこへ行って」を口ずさむのも、モリーがその歌を歌うからだけではなく、劇場でモーツァルトの『ドン・ジョヴァンニ』を観たことがあるからだ。

劇場にも階級による相違が現れていた。それは客席にも明らかだ。ブルームとモリーの「特別席」(11.1050)での観劇は一度のみで、しかも招待によるものであつた。普段は「天井桟敷」(11.624)での観劇がせいぜいである。それでも高いのか、ブルームは警察の知人から「パス」(6.188)をもらおうと算段しているくらいである。劇場も警察の監視下にあり、切符が警察に配布されていたのである。ブルームもそれほど豊かではなく、自らの席や他の観客の存在に意識的である。彼は観劇するだけではなく、特別席の貴婦人ミセス・イェルヴァートン・バリーの「胸の大きく開いた、オパールいろの光沢を放つ舞踏会服」に、そしてその「比いない二つの乳房」(15.1014)に視線を向けている。上流階級に対して怨念を抱いていることは間違いない。

値段も安く楽しめたのはミュージックホールである。その筆頭はエンパイア・ミュージックホールで、デイル通りとクロプトン・コートとの交差する場所にあつた。興行主にちなんで、ダン・ラウリー・ミュージックホールとも呼ばれた。またティヴォリ座は1897年11月26日、リフィ川沿いのバー河岸12-13番地の「調停ホール」跡に開館し、グランド・リリック・ホール(第十七挿話)と呼ばれていた。ファリントンが飲酒の最中、腕相撲で負ける相手は、そこで出演しているイギリスの一座の男である(「対応」)。また繁華街のグラフトン通りに接するアダムズ小路にも、かつてハープ・ミュージックホールがあつた(第八挿話)。十年前に閉館したとブルームが懐かしむほどである。ミュージックホールはイギリスの産業都市の労働者のための娯楽として生まれたが、ダブリンでは中流の人々を取り込み、一夜の客は約2,000人であつた(Herr)。

ミュージックホールの出し物は多様である。トム・ロッチフォードがボイランに売り込もうと考案したのは、そうした多様な番組の進行を教える仕掛けである（第十挿話）。たとえば、アクロバット、レスリング、魔術、喜劇、腹話術、唄などとともに、「市民」の連れている犬、ギャリーオーエンも舞台に出たいと思っているように、犬の芸もあった。その意味では、目まぐるしく変転する『ユリシーズ』の文体を論じるのに、ミュージックホールの出し物になぞらえられることもある。

人々の間には人気俳優も生まれた。ミス・カーニーたちの間ではイギリスの女優ミセス・パット・キャンベルのことが話題にのぼり（「母」）、スティーヴンの母親は『怪傑ターコー』に主演したロイスを懐かしみ（第一挿話）、ボイランの秘書ミス・ダンがイギリスのパントマイム役者マリー・ケンダルに嫉妬をもやし（第十挿話）、ガーティはイギリスの男優マーティン・ハーヴェイに惹かれている（第十三挿話）。ブルームも引出しにイギリスの女優モード・ブランズカムの写真をしまっている（第十七挿話）。劇場での物語が人々の思考に影響を与えていた好例である。

そうしたうちでも、W. B. イェイツたちのアビー劇場の設立は画期的であった。本格的にアイルランドの国民劇を上演する施設として、そして国民のアイデンティティ確立の舞台として期待された。その名前の通り、下アビー通り 27 番地の機械工ホールに建設（第九挿話）され、562 席を有する劇場であった。当時、「国民劇場とは何か」をめぐる喧しい議論も起こり、評論「喧騒の時代」（1901）でジョイスも反論を試みている。が、そうした議論を交す以前に、三大劇場やミュージックホールの観客の関心を惹くことができたかどうか疑問である。その客席の四分の三は空席であったという。ダブリンはやはり「色褪せた都市」であったのだろう。ブルームはイェイツの『キャスリーン伯爵夫人』（15.4950）の喧騒も、J. M. シングやレディ・グレゴリーやダグラス・ハイドといった文学者の名前も、そしてアビー劇場の設立さえ知らない（Potts）。

ちなみに、映画の登場も大衆にとって驚異であった。ジョイスがアイルランド最初の映画館、「ヴォルタ・シネマ」を開館したのは 1909 年である。だが、早くも 1896 年、ミュージックホールのダン・ラウリーで上映されたことがある。ジョイスの「ヴォルタ・シネマ」はほどなく経営不振に陥った。にもかかわらず、1916 年までに、アイルランドには 149 もそうした施設ができていた。映画の幕開けの時代であった。

## 音楽

ダブリンはまた音楽の街でもあった。老若男女がオペラや演奏会のことを話題にし、中流以上の各家庭には、トマス・ムーアの『アイルランド歌曲集』（1807-34）が常備されていた。したがって、いづこの家庭でも、ピアノの演奏や歌に耳を傾け、ケーキやお茶を楽しんだことであろう。1901 年の統計によると、ダブリンは人口 30 万人ほどの都市でありながら、実に 402 人（女性 233 人、男性 169 人）もの音楽教師がいた。ミス・シニコウ（「痛ましい事故」）やミス・メアリ・ジェイン（「死者たち」）も、そうした音楽家たちの一人である。

音楽は家庭の団欒に資するところ大である。ミセス・ムーニー経営の下宿屋では、日曜日の夜に表の

客間でパーティを催し、娘ミス・ムーニーもミュージックホールの唄を歌う（「下宿屋」）。そしてチャンドラーも「ちょっとした音楽もやれる」からと旧友のギャラハーを家に誘い（「少しの雲」）、マライアがジョー宅で彼の妻の伴奏に合わせて『ボヘミアン・ガール』を歌い（「土」）、モーカン家のパーティでは本格的な音楽会が催されている（「死者たち」）。スティーヴンも幼少のころに、母のピアノの伴奏に合わせて、歌い踊っている（『若い芸術家の肖像』）。そのような状況を考えるなら、イーヴリンの家庭のオルガンが壊れているといった描写は、母の亡き後、彼女の家の団欒が失われていることの示唆になる（「イーヴリン」）。

アイルランドの伝統音楽を推進する年一度のコンクール、「音楽祭」も1897年より開催されることになった。民族主義運動の一環として創設されたが、音楽に寄せる人々の熱意を高めるものでもあった。ジョイス自身も、1904年5月16日の祭典に参加して、メダルを獲得したことがある。そして同年8月27日、エインシェント音楽堂で、著名な音楽家のJ. C. ドイルやJ. コーマックと共演し、1798年のアイルランドの反英蜂起を題材としたバラッド、「クロッピー・ボーイ」を歌っている。キャスリーン・カーニーはそうした民族運動に乗じて名を売る（「母」）が、逆にモリーはイギリス軍虜囚であることが知られ、プロテスタントの多いアイルランドの北部、ベルファストで公演することになる（Potts）。音楽も民族主義と無縁ではない。

音楽会の会場としてはロータнда、エインシェント音楽堂、ダブリン国際展示センターなどがあった。たとえば、ミスタ・ダッフィはそれらの音楽会へモーツァルトを聞きに出かけ、やはり音楽好きのミセス・シニコーに出会う（「痛ましい事故」）。入場券は1から3シリングほどである。酒の値段からするとかなり高額ではある。それでもミセス・カーニーは、エインシェント音楽堂での娘の公演のため、2シリングの入場券を知人に12枚配布している（「母」）。

さらに、路上にもアイルランドの象徴であるハープ弾きがいて、アイルランドのメロディを奏でていた。「二人の伊達男」では、キルデア通りでトーマス・ムーアのフィオヌアラの曲が奏でられ、レネハンはわれ知らずそのメロディに身を任せている。その一方、前衛芸術を愛好する人々からは、エリザベス朝の音楽に対する関心も起こった。これはアイルランドという地域を越えた汎ヨーロッパ的な関心である。ヴィロナはマドリガルの魅力を語り（「レースの後で」）、スティーヴンはロンドンの楽器作者アーノルド・ドルメッチにリュートを作らせようかと考える（第十七挿話）。

にもかかわらず、古典音楽は他の都市と比べてかなり低迷していた。1800年にアイルランド議会がイギリスに併合されて以来、財政難のために有能な音楽家が国外に流出し、同時に古典音楽の活動そのものがイギリス化と混同されたためでもある。したがって、抑圧されたものの回帰であるかのように心に響くフォークロア、「オクリムの乙女」のような歌（「死者たち」）を集め、構成することなどでできなかった。民族運動が高揚していたにもかかわらず、アイルランドにはノルウェーのグリーグやチェコのスメタナ、ましてやハンガリーのバルトークやドイツのワーグナーを輩出する雰囲気はいささかもなかった（Brown）。トマス・ムーアの後、『ロッシェルの包囲』（1835）、『ボヘミアン・ガール』（1843）、『カステイルの薔薇』（1857）のマイケル・バルフ（1808-70）、『マリターナ』（1845）などのウィリアム・ヴィ

ンセント・ウォレス (1813-65) といった、オペラ作曲家が誕生したにとどまった。

## 酒 場

さらに市民の最大の娯楽場として酒場が挙げられる。ステイーヴンはアイルランドを「恐ろしい渇きの島」(3.153-4) と呼び、ブルームは「居酒屋の前を一度も通らないでダブリンを端から端まで歩けというのは相当な難題だろう」(4.129-30) と思う。ダブリンの酒場は、酒類販売許可のある店が800軒余りあり、その他のもぐりの店を合わせると、実に1,000軒以上もあったことになる。貧しいから飲むのか、飲むから貧しいのか、市民はよく飲んでた。

実際、『ユリシーズ』には数多くの酒場が挙げられている。マリガンがステイーヴンとの待ち合わせに指定したシップ酒場(第一挿話)、ブルームの家の近くにあるオローク酒場やマコーリー酒場(第四挿話)、ブルームから情報をつかんだと誤解する競馬狂のバンタムの入るコンウェイ酒場(第五挿話)、葬式帰りの人々が悲しみを洗い流すダンフィ酒場(第六挿話)、新聞記者が集うオーヴァル酒場、ステイーヴンが音頭をとって入るムーニー酒場(第七挿話)、ブルームが軽食をとるデイヴィ・バーン酒場(第八挿話)、役所に関係ある人々のキャヴァナ酒場(第十挿話)、オーモンド・ホテルの酒場(第十一挿話)、「市民」と呼ばれる民族主義者の溜り場バーニー・キアナン酒場(第十二挿話)、国立産婦人科病院での妻の出産を待つ夫たちのパーク酒場(第十四挿話)、いつでも飲める夜の街の娼家(第十五挿話)、ブルームがボイランと密談したらしいブリーディング・ホース酒場、波止場に最も近いなつかしのアイルランド酒場、御者溜りのすぐ近くのネイグル酒場(第十六挿話)などがある。さらに、『ダブリンの市民』ではスコッチ・ハウスやマリガン(「対応」)、ジョン・ノーランやマコーリー(「恩寵」)などといった酒場が挙げられている。そして『フィネガンズ・ウェイク』では、主人公HCEがフィーニックス公園の近くのチャペリゾッドで、マリンガー・ハウスという酒場を経営している。

いずれも有名であるが、『ユリシーズ』では、デイヴィ・バーン酒場とバーニー・キアナン酒場が、それぞれ第八挿話と第十二挿話の舞台になっている。デイヴィ・バーン酒場はデューク通り21番地にある酒場で、1889年にデイヴィ・バーンによって始められた。その向かいのベイリー酒場と同様、ジェイムズ・ステイーヴンズ、パトリック・キャヴァナ、ブレンダン・ビーアンなど著名な文学者が集った(Bennet)。一方、バーニー・キアナン酒場はリトル・ブリテン(小さなイギリス)通り8-10番地にあり、市場や四法院や総督府などからの客が立ち寄った。四法院にかけて「アピール(控訴=魅力)裁判所」などとも言われ、民族主義を煽っていた。

酒場の開店時間は、その酒場の営業許可証により一律ではなく、「事前許可制法」で定められていた。「はしご」(pub crawl)する人々はその辺の心得があった。『ダブリンの市民』所収の「対応」では、ファリントンたちがデイヴィ・バーン酒場の後、バー河岸のスコッチ・ハウス酒場へ移動し、そこが閉まるとプールベッグ通りのマリガン酒場へ出かける。一般的に、閉店は夜11時で、その5分くらい前に最終の注文を知らせるが、スコッチ・ハウス酒場の営業許可証は「早閉まり営業許可証」であるため、それよりも早いということである。旅行者には平常の営業時間以外にも販売できるという「特例」

(bonafide) もあり、旅人にかこつけて遠出する人もいた。

酒の種類は様々である。ビール類としては、「市民」と称される人物の飲む「お国ぶりの酒」ギネス(第十二挿話)を筆頭に、ミスタ・ダッフイの飲む外国製のラガー(「痛ましい事件」)、安酒としてブルームが思い浮かべる壘ビールのオールソップ(第八挿話)、ステイーヴンたちが酒宴で飲む(第十四挿話)、またジャック・ムーニーが部屋で楽しむ(「下宿屋」)イギリス製のバス・ビールなどもあった。ワインではブルームの飲むブルゴーニュ・ワイン、あるいはダブリン市裁判所判事の飲む「埃をかぶった瓶に年号のはいった」ものもあった(8.1155)。またウイスキーではブッシュミルやジェイムソン(第十八挿話)などが有名である。さらにファリントンの飲むパンチ(「対応」)などもある。飲む酒により階級もわかる。上流階級がどことなく貴族的な感じがするワインやシャンパンを好むのに対し、下層階級は手軽なビールを飲む傾向にあった。

値段は安い。マリガンが「一杯やる分だ」(1.724)と言って、ステイーヴンに2ペンス要求しているように、ギネス・ビール1パイントで2ペンスであった。酒場で仲間と飲む場合は、「一わたり」(round)と言って仲間が順におごってゆくため、知らずにたくさん飲む。ファリントンなどは三軒のハシゴの後も酔った気がしないというが、15～6パイントは飲んでいるだろう(「対応」)。そして安いことを幸いに、金が無いのに仲間に加わる「たかり屋」もいる。レネハンはその典型で、「二人の伊達男」では「たいていの人はレネハンをたかり屋だと考えていた」と語られているし、『ユリシーズ』でも彼はステイーヴンやボイルンにたかっている。「市民」もその一人である(第十二挿話)。

飲酒の年齢はアイルランドでは現在18歳以上である。かつては制限がなかったらしいが、それでも飲酒の弊害のために、少年の飲酒は好ましく思われなかった。フリン姉妹のように通夜のために少年にシェリー酒を勧めることもあるが(「姉妹」)、選挙事務所の管理人のジャックじいさんは、19歳の息子が給料をみんな飲んでしまうと嘆き、使い走りの17歳の少年がスタウトを飲むのに怪訝な顔をしている(「蕪の日の委員会室」)。少年たちもいずれ酒に溺れる大人になる。

実際、ダブリンでアル中の人を探すのに苦労はしない。モリーの歌の伴奏をしたことのある音楽教師のグッドイン教授は、酒で体を壊して死亡している。その他、フリーマンズ・ジャーナル社の酒やけしている編集長のマイルズ・クローフォード(第七挿話)、仕事が終わるとすぐに酒に飛びつくミスタ・カーナン(第十挿話)、いつも酒場に陣取っている「市民」(第十二挿話)など枚挙にいとまがない。そもそもディグナムは、アル中のためにミスタ・メントンの法律事務所を解雇され、アル中のために心臓発作で亡くなった。その葬儀に出席できないガーティの父親も、やはりアル中で体調を崩している。また葬儀に出席できても、ディグナムの遺児のための寄付ができないほど、酒のために零落したステイーヴンの父親なども同類である。ジョイスの身体描写は細密だ。

酒にまつわる失敗なども数多い。ミセス・カーナンは「夫がよく深酒をするのはお天気と同じようなものだときらめて、二日酔いするときにはまめまめしく看病してやり、いつもなんとかして朝食を食べさせようとした」らしい。が、その夫のミスタ・カーナンは、便所で横転して舌を切るような醜態を演じる(「恩寵」)。ファリントンは酒を飲んで帰宅し、子供を鞭打つことで酒場での鬱憤を晴らす(「対応」)。

フレディ・マリズが親戚一同から鼻つまみ的に見られているのも、酒にまつわる過去の行状があるからである（「死者たち」）。ステイヴンも給料日であることを幸いに痛飲する。彼は新聞社の人々をムーニー酒場へと招待し（第七挿話）、さらにレネハンと別のムーニー酒場でウイスキーを飲み（第十一挿話）、国立図書館でシェイクスピア論を披瀝した後、モイラ酒場からラルチェット酒場（第十五挿話）へ移動し、国立産婦人科病院で飲み、さらにパーク酒場へとはしごし（第十四挿話）、挙げ句の果てにイギリス兵に殴られて気絶する。彼はあやうく逮捕を免れたが、飲酒による騒乱は犯罪であった。

女性も例外ではない。酒場に女性が入ることは禁止されていたが、雑貨店でも酒を販売しており、女性も買物の折にそこで飲むこともできた。女性でも飲酒癖のある人は多く、酒のために家具を質入れるマーチン・カニングムの妻などその典型である（第六挿話）。ブルームは自宅近くの上ドーセット通りで、早朝、酒壇を握りしめている老婆を目撃し（第四挿話）ている。ミセス・シニコーはミスタ・ダッフィと別れてからすっかりアル中になっている（「痛ましい事件」）。ブルームの妻モリーもアル中の気があるのか、「ディナーのときのスタウトをやめなくちゃ／でももうやめられなくなっているかしら」（18.450）と独白している。

飲酒を戒める運動がなかったわけではない。その嚆矢となったのは、シオポールド・マシュー神父（6.319-20）である。「禁酒の使徒」と呼ばれ、その像がオコネル通りに建てられている。1838年から大飢饉前まで禁酒運動を推進しかなりの成果を収めたが、しかし教会の支持を得られず大飢饉後に挫折した。その後、禁酒運動はしばらく停滞し、1880年代末に、ジェイムズ・A. カラン師がその仕事を継承した。1896年にベルヴェディア・コレッジでジョイスたちに地獄の説教をした人物でもある（Ellmann）。1888年に発刊を開始した教会の冊子『アイルランド聖心の使者』を利用し、マシュー神父よりも漸次的に、また民族主義者とも連携しながら禁酒を推進したため、カランの運動は死後60年も存続することとなった。「饗応反対連盟」という「一わたり反対する団体」も1902年に誕生し、「禁酒アイルランドは自由アイルランド」（12.692）などという標語も広まった。ジャーナリストでもある民族主義者のモーランは、酒類製造業者を揶揄する「酒の給仕人」（Mr Bung）という言葉を出し、強力な禁酒支持を表明した（Malcolm）。そのため、禁酒を看板に掲げる禁酒ホテル（6.317）、コーヒー・パレス（11.486）、御者溜り（第十六挿話）なども誕生した。

それでも禁酒への抵抗は根強かった。ダブリンの市会議員の約三分の一が酒場経営者で、禁酒が難しかったこともあるが、しかし何よりも、市民たちが飲むことに喜びを抱いていたためである。ブルームは「海外駐屯のほろ酔い気分の帝国」（5.72）とイギリス兵を嘲笑するが、「ほろ酔い気分」なのはダブリンの人々であったであろう。ブルームが「市民」に嫌われるのも一緒に飲まないからである。節度がありすぎるらしい。ブルームがもっともらしく主張するところによると、絶対禁酒を誓っているわけではなく、「必ずみずから一線を画してそれを越えない、さもないといろいろな面倒なことを引き起こす」（16.92）からである。飲酒にもそれなりの苦悩があることを彼は知らない。

すでに述べたように、「酒場」そのものは当局の支配下にあった。それは騒乱の温床としての飲酒を統制し、治安を高めるための囲い込まれた空間でもあった（Malcolm）。ダブリン首都警察の大きな役目の

一つが酒場の見回りであった。酒場は多様なイデオロギーを包摂する共同体などではない。モリーは「男の言う友情ってのは〔酒で〕おたがいをころしあってそれからお墓にうずめあうこと」(18.1270)と皮肉っている。

## スポーツ

最も健全な娯楽はやはりスポーツである。『ユリシーズ』で行なわれているか、言及されているスポーツを列挙するなら、ホッケー(第二挿話)、サンドー式体操(第四挿話)、ポロ、レガッタ、クリケット(第五挿話)、自転車競走(第五、十、十三挿話)、狐獵(8.341)、ボクシング(第十、十二挿話)、ハーリング(第十二挿話)、ローン・テニス(12.890)などがある。

これらのうちでも特殊なのはサンドー式体操である。創案者のユージーン・サンドーが『強壮な肉体とその獲得法』(17.517)で説明しているように、これは筋力強化の運動である。ブルームはかつて試みながらも途中で放棄したことがあるが、最近では体調が思わしくなく、「若返りを実現する方法」として、再度この運動を始めようかと思案している(17.509-24)。優生学の浸透などにより、健康美が賛美され、サンドー式体操は多くの人々の間に広まっていた。日本にも明治時代にこの体操が紹介されていた。漱石も試みたとされる。

もちろんスポーツの醍醐味は勝負にあり、その歴史や対戦において、政治的な意味が含み込まれることも多かった。1884年の「ゲール体育協会」の設立による古来のスポーツの復活は、何よりもアイルランドの民族主義と関わっていた。事実、ゲール体育協会は、アイルランド古来のハーリング、アイリッシュ・フットボール、ハンド・ボールなどを復興させ、民族主義の高揚に大いに役立った。地域対抗であるために、郷土への愛とともに国家への愛を育てた。またアイルランド固有のスポーツであるために、イギリスへの敵意を増長した(Lyons)。フィーニックス公園でポロのようなイギリスのスポーツは認められているのに、アイルランドのスポーツのハーリングの練習が禁止されるという事態も起こったりし、民族意識を一層煽っていた。市議員兼国会議員のナネッティがイギリスに旅立つのは、下院でその戒律の撤廃を陳情するためである(第十二挿話)。

逆に、クリケットはイギリスのスポーツである。デージーの経営する学校のようにイギリスの教育方針を採用しているプロテスタント系の学校で、あるいはカトリック系のクロンゴーズ・ウッド・コレッジのような紳士を養成する学校でも、クリケットが行なわれていた。『ダブリンの市民』の「出会い」では、クリケットのバッジをしていたために、マーニーはプロテスタントに間違われてしまう。同じくテニスもイギリスのスポーツで、民族主義者たちはイギリス最良の「自称紳士」(12.889)のスポーツと非難した。ブルームがテニスの効用を説き(12.945-53)、郊外に邸宅を所有できた場合にテニス・コート(17.1552)を作ろうと思うのは、彼がプロテスタント校出身であるからだ。同じくヘインズが「テニス用のシャツ」(1.479)を着ているのは、彼がイギリス人であるからである。その一方でスティーヴンは、イギリスの詩人のロード・テニソンとローン・テニスをかけて、「ローン・テニソンか。紳士の詩人だよ」(3.492/9.648)と二度までもつぶやく。テニスの上品さへの敵対があるためである。

その他、比較的新しいスポーツが自転車競走である。またたく間に広まった。クロンゴーズでステイヴンが眼鏡を壊したのは、自転車競争の練習をしている生徒にぶつかったためである（『若い芸術家の肖像』）。そして6月16日にはトリニティ・コレッジで学生が競争をしている（第五、十挿話）。週刊誌『アイリッシュ・サイクリスト』後援の自転車旅行クラブもできていたし（第十五挿話）、新婚旅行に自転車を利用する夫婦も出てきた。

## 競馬

ギャンブルもまた娯楽の一つであり、人々はどんな対戦であれギャンブルにしてしまう。ギャンブルは結果が出るまで楽しめる。『ダブリンの市民』の「対応」では、イギリス人の興行師とファリントンの腕相撲をめくり、酒場の仲間たちの間で賭けが行なわれている。また『ユリシーズ』では、マイラ・キョーとベネット特務曹長とのボクシングの対戦で、やはりボイランが賭けの胴元になっている。映画『静かなる男』（1952）はそうしたアイルランド人の性格を映し出している。

そうしたギャンブルのうちでも最大なものが競馬である。ジャック・ムーニーのような情報通もいれば（「下宿屋」）、レネハンのような予想屋もいた。『スポーツ』（7.387）のような専門紙だけでなく一般の新聞でも予想記事を掲載していた。競馬は庶民の憩いであったのである。ブルームのような市民でさえ、妻やミセス・グリーンたちと、レパーズタウン競馬場へ出かけている（第十五挿話）。そしてステイヴンも克蘭リーとともに、やはり同競馬場で賭けたことがある（第二挿話）。

『ユリシーズ』では、アスコット・ゴールドカップ・レースが市民の関心事であり、物語のテーマになっている。1904年6月16日の3時出走のそのレースについて、『フリーマンズ・ジャーナル』紙ではジンファンデルが有望であるとする他社の記事を載せ、レネハンは同社の『スポーツ』紙にセプターが楽に勝つと予想した（第七挿話）。だが結果的には、ダークホースのスローアウェイが優勝し、ジンファンデル、セプターという順であった。賭け率は20倍で、レネハンがブルームが大儲けをしたという噂を流し責任転嫁するが、彼の予想にたよったボイラン、バンタム・ライアンズ、コーリーなどから、その後の反目が予測される。

奇妙にも、ダブリンではグリニッジ標準時の3時25分まで賭けられたが、すでにその時間には勝敗が決まっていた。ダブリンはグリニッジ標準時より25分遅れていて、電信がまだ到着していなかったのである。レネハンが三時過ぎに賭け率を見に賭け屋のライナムに立ち寄り（第十挿話）一方、ブルームはその時差を利用して勝敗を知ることができないかと思案する。ちなみに、アスコット競馬の結果が判明するのは四時で、ボイランがモリーのもとに到着する時刻である。

馬と言えば、毎年8月にポールズブリッジのRDSで、馬事大会が開かれた（第七挿話）。1904年においては8月23日から26日までであった。これはダブリン最大の祭りで、イギリスなどからも観光客が訪れた。馬好きな人々が多かった。独立後も、イギリスの国歌が歌われている。「牛」と「馬」はそれぞれアイルランドとイギリスを象徴している。

## 旅行

旅行も一般的な娯楽であった。ブルームは、世界旅行から7年振りに帰国したという、正体不明の水夫の話に耳を傾けながら、旅へと想いをはせる。彼はホーリーヘッドへ出かけたぐらいではあるのに、「精神的には生れながらの冒険家」(16.502)であると自負している。行きたい場所は海外ではロンドン、アイルランド国内ではサイクリングをするのに理想的なウィックロー、交通の便はよくないが見晴らしのすばらしいドネゴール、娘ミリーが働いているマリンガーなどである。旅に出れば都会生活の気苦労から解放され、視野が広がり、若返りや健康増進にも役に立つというのが彼の考えである。

ブルームが魅力的であるとする場所は、それ以外にもまだまだたくさんある。アイルランド国内では、モーハーの断崖、コネマラの荒野、ネイ湖、ジャイアンツ・コーズウェイ、キャムデン要塞とカーライル要塞、ティッペラリーの黄金渓谷、アラン諸島、ミーズ州王領の牧草地帯、キルデアのブリジッドの楡、ベルファスト市のクィーンズ・アイランド造船場、鮭の瀬、キラニーの沼湖地などがある。海外では、セイロン島、聖都エルサレム、ジブラルタル、パルテノン神殿、ウォール街金融市場、スペインのラ・リネア闘牛場、ナイアガラの瀑布、エスキモーの住む土地、禁断の国チベット、ナポリ湾、死海(第十七挿話)などがある。

旅行は交通の便が開かれるにつれさかんになった。アイルランドでも、1850年代以降、新航路が開設され、鉄道が敷設されるようになった。夥しい数の旅行パンフレットが出版され、ホテルなども観光案内書を発行し、個人の旅行記も出版されていた。オコネル通りには「フォーコナー鉄道ガイド出版社」(6.317)もあった。アイルランド関係だけでも、十九世紀に約800百冊、また二十世紀の最初の十数年の間にも約100冊、案内書が書かれ旅行熱を煽っていた(McBride)。そして1841年に旅行代理店を設立し成功をおさめた「トマス・クック」(12.193)に倣った各種の団体旅行が企画される一方、二輪馬車や自転車をういた辺境の地への一人旅もあった。ブルームの知識もそうした情報によるところ大で、自らも「ダブリン市とその周辺におけるアイルランド観光客の流れを発展させる」(17.1720)計画さえ夢想している。

テキストからいくつか例を引き出してみるなら、ミス・アイヴァーズやミス・カーニーはゲール語の話されているアラン諸島での休暇を計画し、ゲイブリエルは大陸で自転車旅行を考えている(「死者たち」)。マリガンは鬱屈したダブリンから明るい開放的なギリシアへの旅にステイーヴンを誘い(第一挿話)、コンミー神父はイギリスのバクストンに保養に出かける予定を組み(第十挿話)、ミス・ドゥースはアイルランド海に面した北部のダウン州のロストレヴァーで休暇を過ごしたばかりである(第十一挿話)。ロンドンやパリのことに詳しいギャラハーをチャンドラーが羨んでいるように(「小さな雲」)、一般的には、国内よりもイギリス、イギリスよりも大陸への願望があった。

旅行と言えば、カメラの普及も一役買っていた。マリガンが友人のパノンと写真屋で働くミリーとの関係を「スナップショット一発」(1.685)と茶化しているが、「スナップショット」とは、本来は狩猟の言葉で「目の獲物を捕える」の意である。早くも1890年代に、手軽なカメラが普及し、旅行記などに写真を掲載して人々を魅了していた。人々は写真と現実との一致を確認するために旅行に駆り立てられ

たと言ってもいい (McBride)。「複製技術の時代」の到来である。

それでも、ブルームのような家庭では旅行も簡単ではなかった。ピクニックぐらいが手軽な娯楽であった。たとえば、ブルームのモリーへの求婚はホースの丘へのピクニックでのことであった (第八, 十八挿話)。ホースの丘へのピクニックは、イーヴリンの一家も出かけたことがある (「イーヴリン」) ように、一般の家庭ではかなり普通であった。ネルソン塔から「四十五分そこそこ」 (第十六挿話) で行ける。またブルームたちはシュガーローフ山へも出かけている (第八, 十八挿話) し、またモリーは近いうちに葎園に出かけようと思っている (第十八挿話)。『若い芸術家の肖像』でも、スティーヴンの一家は、近くを散策するのみならず、ウィックロー山脈への散歩も行なっている。

海も手軽な行楽地である。ブルームはモリーとブレイにボート漕ぎに出かけてもいる (第十八挿話) し、娘ミリーを連れたエリンズ・キング号でのダブリン湾の遊覧も楽しい思い出である (第四挿話)。余裕があるならば、ミセス・カーニー宅のように、スケリーズ、ホース、グレイストーンズなどの保養地へ (「母」) 行った。さらには、イーストボーン、スカパロ、あるいは「海辺のかわいい娘たち」の舞台のマーゲイトといった、イギリスの保養地にも行くことも可能であった。ダブリンとロンドンを結ぶ汽船で、サウサンプトンやポーツマスなどに寄港もできた。海ではピュアフォイがやるように釣りも楽しめたし (第十四挿話)、海風のオゾン健康にも有効であるといった認識も市民の共有するところであった (『若い芸術家の肖像』)。

### 読書・新聞・ゲーム

あるいは、家庭でのんびり過ごすこともできる。読書をしてもいい。モリーは小説『サーカスの花ルービー』を読みあげ、さらにポール・ド・コックのポルノまがいの作品を読みたいと思っている (第四挿話)。ブルームも常々古書を漁り、暇にまかせて読書している。雑誌も数多くの人に読まれていた。ゲーティは『プリンセス読物』、『レイデイズ・ピクトリアル』、『週刊ピアソン』などを、モリーは『ジェントル・ウーマン』を、ブルームは『テットビッツ』や『フォートビッツ』を読んでいる。いずれもイギリスの雑誌で、賛否両論があった。

新聞はさらに手軽な娯楽である。『ダブリン・イヴニング・メール』には「シドニー・パレイド駅で婦人が死ぬ／痛ましい事故」という記事 (「痛ましい事故」) が、『フリーマンズ・ジャーナル』にはアイルランド復興運動のエール・アブー協会の音楽会の様子 (「母」) が、また『デイリー・エクスプレス』にはゲイブリエル・コンロイの書評が掲載されていたかもしれない (「死者たち」)。新聞にはダブリンの人々に身近な問題があふれ、知人の死亡記事や競馬の勝敗の結果なども掲載され、アイルランド自治をめぐる議論や国際情勢なども大々的に報道されていた。ニューススタンドの「新聞掲示板」で、あるいは新聞売りの少年の口コミにより、人々の記事についての人々の興味も喚起されていた。1904年6月16日の『フリーマンズ・ジャーナル』には、アスコット・ゴールドカップ・レース、ニューヨークの惨事、劇場での公演などが報道されている。新聞記事は人々の会話の素材を提供してくれる。

ゲームで楽しむのもいい。チャールズ・スチュアート・パーネルの兄であり、ダブリン市議会の式典

長であるジョン・スチュアート・パーネルは、議会への出席を無視し、ダブリン製パン会社でチェスに熱中している(第八挿話)。チェス・クラブもいくつかあった。家族で楽しめるゲームも様々であった。ブルームは、シンプソン家の「新宅びらき」(housewarming)に招かれ、「当っこ遊び」(the Irving Bishop game)をしている。これは一種の読心術のようなゲームである。「目隠しをしてピンを見つたり、相手の心を読んだりして? 質問、この嗅ぎ煙草入れの中身は何か、なんてね」(17.444)と、ミセス・グリーンがブルームに想起させている。

さらに「ジェスチャー遊び」(charades) (4.345)もブルーム夫婦にはなつかしい思い出である。これは動作からテーマを推測するゲームで、ブルームは、結婚前の1887年、ドルフィンズ・バーンのルーク・ドイル家で「リップ・ヴァン・ウィンクル」を演じたことがある。彼は「リップ。ヘニー・ドイルの外套の裂け目。ヴァン、パン屋の配達車。ウィンクル、ザル貝と巻貝。そしておれはリップ・ヴァン・ウィンクルの帰宅を演じた」(13.1112)と回想している。その後の夫婦の「眠り」を示唆する物語である。

## 園芸

自然に親しむ人もいた。園芸に関する本も数多く出版され、グラスネヴィン墓地の近くに植物園もでき、自然に対する人々の興味を呼び起こしていた。「ランプ灯のダブリン」という更正施設で働いているマライアの趣味も園芸で、温室で羊歯や白山桃などの世話をし、訪ねて来た人に挿木用に一枝か二枝分け与えている(「土」)。また自然に対する高まりを示すかのように、野外クラブもたくさんあり、男女ともに植物観察を楽しんだ。ステイーヴンの大学の下級生のドノヴァンも、野外クラブの一員である(『若い芸術家の肖像』)。

ブルームもそうした趨勢に呼応して、「ブルーム荘／聖レオポルド邸／フワー館」(17.1580)という郊外住宅を入手した場合には、「樅の苗木を一行に植え、水を注ぎ、枝をおろし、杭を打ち、牧草の種子を播き……長寿を完うしている」(17.1583)場面を想像する。彼の庭には温室、噴水のある築山、蜂小屋、チューリップ、青るつば、クローカス、桜草、なでしこ、スイートピー、すずらんなどを織り交ぜた花壇などがあり、周囲には果樹園、蔬菜園、葡萄園などもあることだろう。球根などはオコネル通りの「サー・ジェイムズ・W・マッキー種子および球根卸売および小売商兼苗木仕立業兼化学肥料代理店」(17.1557-9)で購入可能であった。

にもかかわらず、ジョイスのテキストには園芸を愛でる場面は少ない。登場人物のほとんどが市内に暮らしているためであるだけでなく、アイルランド独自の問題でもあった。裏庭で乳牛を飼っている家もあったし、ブルームの隣家でも鶏を飼い、彼も自ら豆やレタスなど食用の植物を育てようかと考えている(第四挿話)。だが、土を嫌う人が多かったというのが事実である。ヨーロッパの都市生活者とは異なり、ダブリンの市民たちにとり、田舎や土は貧困や無知を連想させるだけであった(Curran)。アビー劇場で上演してみせる農民演劇では牧歌的な田舎が想像されたが、それはアイルランドの現実を映すものではなかった。都市生活者の多くが田舎出身であり、その実情を知る人々は、イギリスの考えを内

在化するにつれ、アイルランドの後進性に劣等感を募らせていたのが実情である (Hirsh)。

### 娯楽とヴィクトリア朝文化

これまで述べてきたように、アイルランドのほとんどの娯楽が、すでにイギリスのヴィクトリア朝文化の支配下にあった。娯楽の出現は経済の発展と関係がある。イギリスでは十九世紀の後半、産業革命の進展に伴い、中流階級から労働者階級へと娯楽が伝播し、そしてアイルランドにもその動向が広がった。「バンク・ホリデー」が誕生するのもそのころのことである。

娯楽が最も自発的な活動であることを考えるなら、イギリス文化が他のあらゆる領域に浸透していたことは予想できよう。スティーヴンが恋人のエマ・クラリーを典型的なアイルランド人女性と見做さないのも、民族主義を称揚しながら、彼女の意識がイギリスの文化によってすでに構造化されている、そう洞察しているためである (『若い芸術家の肖像』)。イギリスの文化は思わぬ場所にまで浸透していたのである。

ブルーム一家もそうしたイギリス文化の影響下にある。ブルームはプロテスタントの高校を卒業し、モリーもイギリス軍の環境で育っている。二人ともカトリックでありながら、アイルランドの文化についての意識が希薄であるのも当然である。これはイギリスによるアイルランドの無意識の植民地化とも思われる。植民地主義の理想は、植民地を母国のコピーに仕立て上げることにある。同じことは思想にも見て取れよう。

### 参考文献

- Brown, Terence. "Music: the Cultural Issue" in *Music in Ireland 1848-1998*, ed. Richard Pine. Cork: Mercier Press, 1998.
- Cronin, Mike. *Sport and Nationalism in Ireland: Gaelic Games, Soccer and Irish Identity since 1884*. Dublin: Four Courts Press, 1999.
- Curran, C. P. *Under the Receding Waves*. Dublin: Gillard Macmillan, 1970.
- Donnelly, J. S. Jr and Kerry A. Miller. *Irish Popular Culture 1650-1850*. Dublin: Irish Academic Press, 1999.
- Ellmann, Richard. *James Joyce*. New York: Oxford University Press, 1982.
- Gillen, Gerard and Harry White, eds. *Music and Irish Cultural History*. Dublin: Irish Academic Press, 1995.
- Herr, Cheryl. *Joyce's Anatomy of Culture*. Urbana: University of Illinois Press, 1986.
- . ed. *For the Lord They Loved: Irish Political Melodramas, 1890-1925*. New York: Syracuse University Press, 1991.
- Hirsch, Edward. "The Imaginary Irish Peasant." *PMLA*, vol. 106, no. 5 (1991).
- Hodgart, Matthew J. C. and Ruth Bauerle. *Joyce's Grand Operoar: Opera in "Finnegans Wake."* Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1997.
- Hooper, Glenn and Leon Litvack, eds. *Ireland in Nineteenth Century Regional Identity*. Dublin: Four Court Press, 2000.
- Huchinson, John. *The Dynamics of Cultural Nationalism*. London: Allen & Unwin, 1987.
- Kerr-Jarrett, Andrew. *Life in Victorian Age*. London: The Reader's Digest Association, 1993.

- Lilienfeld, Jane. *Reading Alcoholisms: Theorizing Character and Narrative in Selected Novels of Thomas Hardy, James Joyce, and Virginia Woolf*. New York: St. Martin's Press, 1999.
- Lyons, F. S. L. *Ireland since the Famine*. London: Fontana Press, 1995.
- McBride, Lawrence W. *Images, Icons and the Irish Nationalist Imagination*. Dublin: Four Court Press, 1999.
- MacDonagh, Oliver, W. F. Mandle and Pauric Travers. *Irish Culture and Nationalism, 1750-1950*. London: Macmillan, 1983.
- Malcolm, Elizabeth. "The Catholic Church and the Irish Temperance Movement, 1838 -1901". *Irish Historical Studies*, vol. xxiii no. 89, 1-16.
- . *Ireland Sober, Ireland Free: Drink and Temperance in Nineteenth-century Ireland*. New York: Gill and Macmillan, 1986.
- O'Brien, Joseph. *"Dear Dirty Dublin": a City in Distress, 1899-1916*. Berkley: University of California Press, 1982.
- Potts, Willard. *Joyce and the Two Irelands*. Austin: University of Texas Press, 2000.
- O'Connor, Frank. *The Backward Look: a Survey of Irish Literature*. London: Macmillan, 1967.
- Rocket, Kevin, Luke Gibbons and John Hill, eds. *Cinema in Ireland*. London: Croom Helm, 1987.
- Watt, Stephen. *Joyce, O'Casey, and the Irish Popular Theater*. New York: Syracuse University Press, 1991.
- Watters, Eugene, and Matthew Murtagh. *Infinite Variety: Dan Lowrey's Music Hall 1879-97*. Dublin: Gill and Macmillan, 1975.
- Sugden, John and Alan Bairner. *Sport, Sectarianism and Society in a Divided Ireland*. Leicester: Leicester University Press, 1993.